

ソ連・ロシアの軍事戦略における潜水艦の意義

尺田 隆一

日本大学大学院総合社会情報研究科

Role of the Submarine in the Soviet Union's/Russian Military Strategy

SHAKUDA Ryuichi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

As the Soviet Union/Russia is continent nations, The Army was the center of the military strategy. In the Stalin government, nuclear arms were not important in the military strategy of the Soviet Union. The Navy was given only supporting role of The Army, and the submarine occupied only the central position in The Navy. However, in the Khrushchev government, the Soviet Union came to attach great importance to the power of the nuclear arms and shifted to the military strategy that interwove nuclear arms. And as the nuclear-powered submarine and SLBM (Submarine-Launched-Ballistic-Missile) were developed in 1950's, the submarine acquired ability for nuclear attack for Retaliation/Second strike and improved attack ability for the enemy fleets. As a result, submarine became indispensable to the Soviet Union's/Russian military strategy. In the contemporary Russia, too, the submarine has been keeping its important role in the military strategy.

はじめに

海洋は、その水面上の部分においては、悪天候や海峡等の場合を除き一般に広く見通しが良い。そこで行動する艦船にとっては、自らの存在を隠すための障害物はないこととなり、隠密行動は困難となる。ところが、一旦水面下となると、その状況を水上あるいは空中から把握することは難しい。その点に着目し、水中を航行することのできる船舶を建造して、それを兵器として用いるという発想は古くからあった。現在では一般に、水中を航行できる軍用船舶のうち、大型のものを潜水艦、小型のものを潜水艇と呼んでいる。

1776年、米国独立戦争において、タートルという潜水艇が史上初めて実戦に投入された。ただし、この潜水艇は人力で航行するものであって、近代的潜水艇と呼べるものではなかった。内燃機関を搭載し、機力で航行できる潜水艇は、1880年前後から各国で建造が始められ、兵器として採用されるようになった。

帝政ロシアでは、1879年に潜水艇が試作され、一応の成功を見ている。それを受けて帝政ロシア海軍は、この潜水艇の改良型を多数建造した。しかし、この潜水艇が軍用に使用されたか否かは不明である。その後も帝政ロシアは潜水艇の開発を続けたと見られるが、自国開発の潜水艇は実戦に耐え得るものとはならなかったため、1904年の日露戦争開戦の後には、ドイツと米国から潜水艇を購入している。

日露戦争終結後、潜水艇に関する技術は一段と進歩し、世界各国は潜水艇を大型化した潜水艦を配備した。1914年に勃発した第1次世界大戦では、潜水艦の本格的な実戦投入が見られた。そこで潜水艦は、主力水上艦艇を撃破するなどの戦果を挙げ、兵器としての有用性および戦術的価値を明らかにした。さらに、ドイツは無制限潜水艦戦の実施によりイギリスの物資輸送を断ち、その息の根を止める寸前まで追い込んだ。このことで、潜水艦の戦略的意義も明らかとなったのである。

ロシア革命を経てソ連が成立したとき、第1次世界大戦および国内戦の影響によりその経済状況は極

めて悪化していた。その中で、革命等により疲弊した海軍を再建するため、高価な戦艦を頂点とする均衡のとれた艦隊を中心とする従来の戦略ではなく、潜水艦を艦隊の主要な打撃力とし、これを支援するために比較的安価な魚雷艇、駆逐艦等の高速艦艇および航空機を整備するという戦略をソ連は選択した。新興派戦略と呼ばれたこの戦略に基づき、ソ連海軍が大規模な潜水艦部隊の整備を開始したのは1928年頃のことである⁽¹⁾。

ところが、ウラジミール・I・レーニンの死後、徐々にソ連国内の権力を掌握していったヨシフ・V・スターリンは、新興派戦略から離れ、大規模かつ均衡のとれた艦隊を中心とする伝統的な海軍戦略を志向するようになった。このような海軍戦略は伝統派戦略と呼ばれ、スターリンにより推進されたものの、ソ連の技術的および経済的問題により、大型水上艦艇の整備は進捗しなかった。ただ、第2次世界大戦勃発時におけるソ連海軍の潜水艦部隊は、数的には世界最大の規模となっていた。

第2次世界大戦後のソ連・ロシアの国家戦略は、米国と対等に立つ超大国を目指すことにより自国の安全保障を確保し、国益を増大させようとするものであった。ソ連には、その国家戦略遂行のための「将来戦の評価、国家の対戦準備、軍事力の建設、戦争遂行方法等に関する政治指導部の見解を反映する⁽²⁾」統一的な公式見解として軍事ドクトリンが存在し、その内容は変化しつつも現在のロシアに引き継がれている。

ソ連の軍事戦略⁽³⁾は軍事ドクトリンの下位概念と

されており、将来の戦争において、ソ連がいかにか勝利するかについての国家および軍の方策である。したがって、軍事戦略の内容は、その時々国内外の諸情勢によって変化し、不変のものではない。軍事戦略が変化すると、その下位概念である作戦術・戦術も変化し、さらには各軍種で実際に運用される兵器も、その意義が変化してくる。他方、兵器の飛躍的進歩により、その兵器の軍事戦略における意義が変化することもある。

本稿では、ソ連・ロシアの軍事戦略の変遷に伴い、潜水艦の能力が発達していく中で、潜水艦という兵器の意義がどのように変化していったかを、理論(ソフト)と兵器(ハード)の両方から明らかにしていきたい。

1 スターリン期

(1) スターリン兵学

スターリン期のソ連の基本的軍事理論は「スターリン兵学」と呼ばれるものであり、スターリンのあらゆる軍事的見解をまとめたものであった。スターリンは、戦争の勝敗に影響を及ぼすさまざまな要因を「銃後の安定性」「軍の士気」「師団の質と量」「軍の装備」および「軍司令官の組織能力」の恒常的5要因と、それ以外の一時的要因に分類した。その上で、スターリンは恒常的5要因を重視し、奇襲を一時的要因として軽視した。

この時期のソ連軍事戦略は、当然恒常的5要因を基本としたものであったため、核のような近代兵器への着目や新しい軍事理論の導入はなく、長期消耗戦の考え方に基づく攻勢防御論⁽⁴⁾を基礎とするものとなった。

(1) 堀元美『潜水艦 その回顧と展望』(原書房、1987年) 36頁。

(2) 宮内邦子「ソ連の国防政策」『防衛アンテナ』第221号(防衛弘済会、1978年9月) 30頁。

(3) ソ連の言う軍事戦略とは「特定の階級の諸利益のための武力戦としての戦争を支配する諸法則を取り扱おう理論的知識の体系である。(中略) 将来戦の条件と性格、戦争準備とその遂行の諸方法、各軍種とその戦略的運用の基礎、ならびに国軍に対する物質的および技術的基盤と指導を研究するものである。同時に、軍事戦略は、具体的な歴史的諸条件のもとにおける国家の戦争準備および武力戦の実施の術に関する中央の軍事および政治的指導、最高統帥部および中央幕僚部の実践的活動の分野でもある」(ワシーリー・D・ソコロフスキー編 [完倉寿郎・実松譲訳] 『ソ連の軍事戦略』[恒文社、1964年] 123頁)。

(4) 攻勢防御論について「先制攻撃は仕かけないが、敵に攻撃されたら直ちにこれに反撃を加え、かつ敵の領土に打って出て敵を敵の領土でせん滅するという考え方である。この考えの基礎には、社会主義国と資本主義国との戦争においては必ず資本主義が敗北、滅亡するというマルクス・レーニン主義思想に裏打ちされた戦争観がある」としている。(宮内邦子「米ソ核戦略理論講座 ソ連編 スターリン兵学の時代から核戦略論争の開始まで」『国防』第19巻第3号 [朝雲新聞社、1970年3月] 85頁)。

(2) 海軍戦略と潜水艦

ソ連・ロシアは元来大陸国家であり、主要な軍種は地上軍である。また、第2次世界大戦における中核戦力は陸軍であり、海軍は副次的役割を与えられたに過ぎず、その上顕著な成果を挙げることはなかった。加えて、西側諸国との圧倒的な海軍力の差を考慮すると、スターリンが「ソ連にとっての正しい海軍戦略は抑止力および防衛のための戦略であると確信していた⁽⁵⁾」ことは間違いないと考えられる。結果的にスターリンは、国家の威信の確保と、西側諸国による海洋の自由な使用を阻害し得る戦力の形成を目的として、大型水上艦艇、潜水艦および基地航空隊からなる均衡のとれた海軍部隊の整備を計画した。また、第1次および第2次世界大戦でのドイツ潜水艦部隊による海上交通破壊戦の実績を踏まえて、ソ連海軍も外洋において行動し得る潜水艦部隊の整備に着手した。しかしながら、空母を建造することができなかつたため、この時期のソ連海軍は外洋においてNATOの制海権に挑むだけの能力を獲得できず、基地航空隊の飛行範囲内の制海権を確保するのが限界であった。

潜水艦に関して、ソ連は、第2次世界大戦の戦利品としてドイツのXXI級やVIIIC級といった潜水艦を接収するとともに、戦時中の潜水艦建造計画をさらに推進した。その結果、ソ連において1946年から1951年までに建造された潜水艦は84隻に上った⁽⁶⁾ものの、これらは沿岸あるいは近海用であり、本格的な長距離航洋型潜水艦ではなかった。

自国の技術を発展させるとともに、接収したドイツの潜水艦の技術を取り入れることにより、ソ連は1951年に初の長距離航洋型潜水艦としてウイスキー級を就役させた。同級は、生産計画が停止されるまで、4箇所の造船所において合計236隻が建造された⁽⁷⁾。また、その内の少なくとも39隻が外国に譲渡されたと見られる。さらに、この時期にはウイ

(5) ロバート・W・ヘリック（久住忠男訳）『ソ連海軍の戦略〔上〕』（時事通信社、1971年）144頁

(6) 滋賀京太郎「ソ連の潜水艦—その発展系列の展望(1)」『世界の艦船』第87号（海人社、1964年11月）80-81頁。

(7) ノーマン・ボルマー（町屋俊夫訳）『ソ連海軍事典』（原書房、1988年）218頁。

スキー級を大型化したズールー級も開発されている。この級は、大型化により耐洋能力が向上したと考えられており、合計26隻が建造された⁽⁸⁾。

(3) 潜水艦の役割

スターリンの海軍戦略は、国家の威信の確保と敵海軍の自由な海洋使用を阻害するための戦力獲得のため、均衡のとれた海軍部隊を整備するというものであった。そのような海軍部隊は、戦艦・空母などの大型水上艦艇を頂点とし、駆逐艦等の軽快水上艦艇、航空機、潜水艦を底辺とする構造となるため、潜水艦もそれに応じた数を必要とした。さらに、潜水艦は大型水上艦艇に費用が安く押さえられるので、建造は加速された。その結果、ソ連海軍は世界最多の潜水艦を保有するに至ったのである。

攻勢防御論を基本とする軍事戦略においては、海軍は陸軍の補助的な役割を与えられるに過ぎない。例えば、陸軍の戦線の海側を防護することや、海路による前線への補給などである。これらは、制空権の確保、強力な機雷原、長距離沿岸砲台の支援といった有利な環境を前提とする。しかし、これらを独力で確保する能力は、当時のソ連海軍にはなかった。結局、この時期のソ連の軍事戦略において、海軍が主体的な役割を果たすことは期待されなかった。また、その一部を構成する潜水艦には、多数をもつての海上交通路の破壊というソ連の軍事戦略の中での補助的な役割が求められた。

2 フルシチョフ期

(1) 大量報復型戦略

ソ連は1949年に原爆を、1953年には水爆を保有するに至るも、マルクス・レーニン主義のイデオロギーと密接に結びついたスターリン兵学の拘束により、その軍事戦略を根本的に変化させることはなかった。

1953年のスターリンの死去に伴い情勢は徐々に変化し、1956年2月、ソ連共産党第20回党大会において、ニキータ・S・フルシチョフがスターリン

(8) ボルマー『ソ連海軍事典』217頁。

批判の秘密演説を行うと、ソ連の軍事戦略に対するスターリン兵学の影響はなくなっていった。ソ連の軍人達にとっても、現実に核兵器の持つ威力を正当に評価し、これまでの攻勢防御論に基づく軍事戦略を再検討する必要がある。これに加え、1957年にICBM(大陸間弾道ミサイル)の実験が成功し、ICBMに核弾頭を搭載することで奇襲性が高まったため、ソ連は核兵器を旧来の軍事戦略の枠組みで論ずることはできなくなり、新たな軍事戦略の構築に迫られたのである。

このような情勢を受け、フルシチョフは1960年1月のソ連最高会議の演説において「わが国家は強力なるロケット兵器を持っている。空軍や海軍は軍事技術の今日の発展において従来の意義を失ってしまった。この型の兵器は縮小されるのではなく、代替される。(中略)海軍において重要なのは潜水艦隊である。海上艦隊は過去に果たした役割をもう果たすことはできない⁽⁹⁾」と述べ、近代兵器礼賛の姿勢を顕著に示した。そして、ICBM等の近代兵器の大威力の恐怖で戦争発生を防止しつつ、その間に通常兵力を大幅削減することで国内の労働力供給を強化し、ソ連経済の活性化を図ったのである。

この時期、米国は、核兵器でソ連の大都市を破壊し得る能力を備えることにより、共産勢力による局地侵略と米本土への核攻撃を抑止するとした、大量報復戦略⁽¹⁰⁾をとっていた。近代兵器を重視したこの時期のソ連の軍事力整備は、米国の大量報復戦略に対応する形で進められていき、その軍事戦略も、ICBM等の近代兵器の持つ大威力に期待する大量報復型のものとなったのである。

(2) 海軍戦略とゴルシコフ元帥

1950年代中期のソ連では、将来の戦争における軍の基本的任務は海軍なしで十分達成でき、潜水艦でさえも地上からのミサイルで破壊できるとされるほ

ど、海軍の存在意義は小さいものであった⁽¹¹⁾。そのため、この時期のソ連海軍は、潜水艦、軽快水上艦艇、基地航空隊といった比較的安価な装備で十分とされた。これは、新興派戦略の再興であると考えられる。

1956年1月、ソ連海軍総司令官の職に就いたセルゲイ・G・ゴルシコフ海軍大将(1962年海軍元帥、1967年ソ連邦海軍元帥)は、建前上、フルシチョフの考え方に従い、潜水艦と航空機を中心とする海軍部隊を整備する方針を示した⁽¹²⁾。その一方、ゴルシコフ元帥はフルシチョフの意向をそのまま海軍部隊の整備に反映させることはせず、フルシチョフの水上艦艇に対する軽視を改めさせる努力を続けた。その結果、1962年、造船所の視察を終えたフルシチョフは「私の見たのは現代の海軍の発展と軍事科学技術における近代的な発展に、完全に適合している艦船だった⁽¹³⁾」と述べ、水上艦艇に対して否定的な自分の考え方を改めたことを明らかにした。このようにゴルシコフ元帥は、潜水艦やミサイル兵器を偏重するフルシチョフの考え方を、戦力の中心は潜水艦としながらも、徐々に均衡のとれた海軍部隊を整備するという方向へと導き、後にソ連海軍が飛躍的に発展するための基礎を作ったのである。

(3) 原子力潜水艦の出現

原子力潜水艦(以下、原潜という)は、原子炉で得られた熱で蒸気を生成し、その蒸気でタービンを回転させることにより動力や電力を得て行動する。通常動力潜水艦は、空気を必要とする内燃機関の発電機を運転し、蓄電池を充電することで潜航時の動力源とするので、充電のため浮上若しくはスノーケル航走を必要とするのに対し、原潜は基本的にその必要性がないため、相当な長時間の連続潜航が可能となる。このことは、潜水艦の隠密性を飛躍的に向上させ、兵器としての有用性をこれまでとは別次元にまで高めたと言える。

米国は、1954年、原潜ノーチラスを就役させ、こ

(9) 宮内邦子「ソ連核戦略理論講座 フルシチョフの戦略思想」『国防』第19巻第4号(朝雲新聞社、1970年4月)70-71頁。

(10) 防衛大学校安全保障学研究会『最新版 安全保障学入門』(亜紀書房、2004年)95頁。

(11) ヘリック『ソ連海軍の戦略〔下〕』7頁。

(12) セルゲイ・G・ゴルシコフ(宮内邦子訳)『ソ連海軍戦略』(原書房、1978年)247頁。

(13) ヘリック『ソ連海軍の戦略〔下〕』15頁。

の分野においてソ連に一步先んじた。しかし、ソ連も原潜の開発に努力しており、1955年には最初の原潜の建造を開始、1957年8月には無事に進水させた。その後、ソ連海軍は、自らの打撃戦力の中核を原潜に定め、その開発・整備に全力を投入していった。

(4) 開発・建造された潜水艦

フルシチョフ期に開発されたソ連の原潜は、攻撃型原潜(SSN)ノヴェンバー級、弾道ミサイル原潜(SSBN)ホテル級、巡航ミサイル原潜(SSGN)エコーI・II級である。通常動力潜水艦では、弾道ミサイル潜水艦(SSB)ズルー改級およびゴルフ級、攻撃型潜水艦(SS)ロメオ級、フォクストロット級およびケベック級が開発されている。

(5) 潜水艦の意義・役割

ア 原潜

フルシチョフ期のソ連は、核兵器の大威力に期待する大量報復型の軍事戦略を採りながらも、現実として起こりうる米国からの侵略に対処するためには、相応の通常兵力も必要とした。その中でソ連海軍には、西側の空母機動部隊、潜水艦等で構成される強力な海軍と外洋あるいは港湾において戦闘することが求められた⁽¹⁴⁾。さらにソ連は、米国の軍事作戦遂行能力は海上輸送に大きく依存していると見ていたので、海上輸送を阻止または破壊することを海軍に求めた。これらは「核ミサイルと魚雷を装備した潜水艦と航空機によって、もっとも有効に達成することができる⁽¹⁵⁾」とされたことから、ソ連海軍の中心戦力は潜水艦であり、その潜水艦には、長時間・高速力での潜航、ミサイル・魚雷の多数搭載⁽¹⁶⁾といった高性能を求めたことから、ソ連は原潜に大きな期待を寄せていたと判断できる。

一方で、米国は空母機動部隊を国外に展開させるとともに、1960年からは潜水艦発射弾道ミサイル(SLBM)ポラリスを搭載したジョージ・ワシントン級SSBNによる戦略哨戒を開始した。これらはいずれもソ連にとって大きな脅威であり、この時期の

ソ連海軍は、主にノヴェンバー級SSNによってこれらの脅威に対抗しようとした。

米国に対する戦略攻撃能力については、ホテル級SSBNが直接米国本土を攻撃できる可能性を有していたことから、軍事戦略上の一応の存在意義はあった。ただし、ホテル級の就役数は8隻と少数であったため実質的な戦略核戦力とはなりえず、それを補うため、沿岸の基地、都市等を攻撃する潜水艦発射巡航ミサイル(SLCM)SS-N-3c(シャドック)と発射母体のエコーI級SSGNは必要であった。

フルシチョフ期に開発された原潜は、第1世代であり技術的には未発達のため、開発および運用共に試行錯誤の連続であったものの、従来の潜水艦とは比較にならない程の高い能力により、ソ連の軍事戦略において高い地位を築くことに成功した。そしてそれは、後の原潜部隊発展の基礎となった。

イ 通常動力潜水艦

原潜は高い性能を有する反面、非常に高価であり建造・運用には高度の技術を必要とする。この時期のソ連は経済力や技術力が不足していたため、すべての原潜の艦種について、十分な戦力となり得る質および量を確保することはできなかった。そこで、この時期のソ連軍事戦略における海軍の最重要任務であった敵空母機動部隊の撃滅⁽¹⁷⁾を達成するため、比較的安価で技術的にも安定している通常動力潜水艦を大量生産して、原潜を補完する戦力としたのである。

ソ連において敵の海上交通路の破壊は、敵空母機動部隊の撃滅と同様に海軍の主要任務とされており、当時のソ連海軍の能力では支援不可能な外洋においても、通常動力潜水艦は第2次世界大戦と同様の海上交通破壊戦を実施しなければならなかった⁽¹⁸⁾。

実際に通常動力潜水艦を特定の海域に展開して長期間作戦行動をとるには、進出・帰投、修理・訓練等を考えると、作戦海域における所望数の3倍を超える隻数が必要である。味方の支援のない外洋において、低速かつ脆弱な通常動力潜水艦で強力な空母

(14) ソコロフスキー編『ソ連の軍事戦略』440頁。

(15) 同上、441頁。

(16) 同上。

(17) ソコロフスキー編『ソ連の軍事戦略』529頁。

(18) 同上、532頁。

機動部隊あるいは護送船団を攻撃するには、予想される犠牲を上回る数をもってする他なく、軍事戦略上の任務達成のためには、大量の通常動力潜水艦を保有する必要があったのである。

1962年のキューバ危機において、ソ連海軍は外洋行動可能な水上艦艇をほとんど保有していなかったため、フォクストロット級 SS およびゴルフ級 SSB を個別に大西洋に進出させた。これに対し米海軍は大西洋に広く部隊を展開しており、その対潜警戒網によりソ連潜水艦のほとんどは探知され、追尾の後に浮上を余儀なくされている。このことから、この時期のソ連通常動力潜水艦には、外洋における作戦能力はなく、SS については基地航空隊の支援の得られる沿岸海域において防勢的作戦を実施するのが限界で、射程の短い SLBM しか搭載できない SSB については戦力と呼べるものではなかった。

フルシチョフ期のソ連通常動力潜水艦は、個別的能力には問題があったものの、ソ連の軍事戦略においては、その膨大な数をもって米海軍との戦力的均衡を保つという一定の存在意義はあったと考えられる。

3 ブレジネフ期

(1) 軍事ドクトリンと軍事戦略の推移

核兵器や ICBM 等の軍事科学技術が進歩する中、ソ連は 1960 年代初頭になってようやく核ミサイル時代に対応する軍事ドクトリンを完成させた⁽¹⁹⁾。この時期のソ連軍事ドクトリンの特徴は、戦略ロケット軍を重視すると同時に、全軍種の協同努力により全面核戦争での勝利を追求する反面、局地戦の遂行あるいは限定化への考慮を払っていないところにある。これは、米国がすでに局地戦やゲリラ戦に苦しみ、大量報復戦略に替わる新たな戦略として、柔軟反応戦略⁽²⁰⁾を打ち出したことと比べ大きな相違で

ある。

その後、ソ連軍事ドクトリンおよび軍事戦略は、米国の柔軟反応戦略に対応すべく柔軟反応型のものへと変化した。さらに 1974 年、アンドレイ・A・グレチコ元帥は「ソ連軍の任務がもはや『わが祖国および他の社会主義諸国』の防衛のみに限定されない⁽²¹⁾」として、ブレジネフ政権において、軍事面での米国との対等、さらには優越を追求した結果、ソ連は自らの利益確保のためには、軍事的プレゼンスあるいは軍事力の行使を躊躇しない、いわば積極的というべき軍事ドクトリンを採用していることを示した。

軍事ドクトリンの修正は、当然軍事戦略にも影響を及ぼした。1976年のキエフ級空母の就役と北洋艦隊への配備、1979年のアフガニスタン侵攻等の事象は、ソ連が海外において通常戦力を使用することを十分に考慮した軍事戦略に移行し、それに対応した軍事態勢を構築したことを示した⁽²²⁾。

(2) 海軍戦略

柔軟反応型の軍事戦略への移行、SSBN による戦略核打撃力の獲得を背景に、ゴルシコフ元帥は、ブレジネフ政権下において、ソ連海軍の任務を世界核戦争時と平時とに分けて以下のように論じた。

世界核戦争におけるソ連海軍の第1の任務は戦略核打撃、第2は敵海軍の海洋方面からの核打撃の弱体化、第3は地上軍が実施する陸上作戦への参加であるとされた⁽²³⁾。また、第1の任務は SSBN により実施され、第2は SSGN、基地航空隊等によるミサイル攻撃での敵空母機動部隊の撃破により達成される。第3は、従来の海上輸送支援あるいは海軍歩兵による上陸作戦等を想定したものである。

一方で、平時においてはソ連および社会主義共同体諸国の利益の防護⁽²⁴⁾を海軍の任務とし、その遂行

(19) 宮内邦子「ソ連核戦略理論講座 核時代のソビエト軍事ドクトリン」『国防』第 19 巻第 6 号（朝雲新聞社、1970 年 6 月）47 頁。

(20) 柔軟反応戦略とは、「核戦争と通常戦争との間に線を引き、仮に核攻撃を行う場合でも都市と軍事目標を区別することで、いきなり大量報復による全面戦争に突入するのではなく、相手の出方によって通常戦争や軍事目標に止めて

おくことにも、全面核戦争にエスカレートさせることにも柔軟に対応できる」戦略である。（防衛大学校安全保障学研究会『最新版 安全保障学入門』96 頁）。

(21) ハリエット&ウィリアム・F・スコット（乾一字訳）『ソ連軍 思想・機構・実力』（時事通信社、1986 年）65 頁。

(22) 同上。

(23) ゴルシコフ『ソ連海軍戦略』251 頁。

(24) 同上。

のため、局地戦および民族解放戦争に適切に対処し得る通常兵力を必要とした。

このような情勢認識の下、ソ連海軍は「全般的に、広範囲に発展を遂げた、換言すればバランスのとれた艦隊創設の方向⁽²⁵⁾」へ、急速に増強されていった。これは、旧来の伝統派戦略に基づく海軍部隊の整備を、科学技術の進歩を踏まえて当時によみがえらせたものといえる。このソ連海軍の増強は、1970年の段階において、向こう10年以内にソ連海軍は米海軍に比肩する戦力を有すると予測されるほど⁽²⁶⁾、西側にとっては大きな脅威と認識されていた。

(3) 開発・建造された潜水艦

ア 原潜

ブレジネフ期は、ソ連の原潜建造技術およびミサイル技術が急速に発達した時期であり、多種多様な原潜が次々と建造された。SSBNについては、米海軍のジョージ・ワシントン級SSBNの大量配備に対抗する形で開発されたヤンキー級を始めとし、デルタI・II・III・IV級、タイフーン級が開発された。1964年末の段階におけるSSBNはホテル級8隻のみであったのに対し、ブレジネフ政権末期の1982年には、北洋艦隊に46隻、太平洋艦隊に24隻のSSBNが配備されていると考えられた⁽²⁷⁾。そして、これらに搭載されたSLBMの合計は、900基を超える数となったのである。

SSGNについては、搭載SLCMの水中発射化が戦術的に必要と判断されたため、新たにチャーリーI・II級を開発する一方、搭載SLCMの水上発射方式という短所を抱えるエコーII級も1970年までに29隻を建造し、ブレジネフ期を通じて運用し続けた。これらは、北洋艦隊に28隻、太平洋艦隊に18隻が配備されていたと見られる⁽²⁸⁾。

ノヴェンバー級SSNは、原子炉等の低信頼性から稼働率が低かったため、戦闘艦としての価値は高い

(25) セルゲイ・G・ゴルシコフ（町屋俊夫訳）『国家の海洋力』（防衛庁防衛研修所、1983年）378頁。

(26) ジョージタウン大学戦略研究所（関野英夫訳）『ソ連の海洋力』（時事通信社、1970年）18頁。

(27) *Jane's Fighting Ships 1981-82* (London: Janes Publishing Company, 1981) p. 470.

(28) Ibid.

ものとは言えず、1960年代に入ると積極化した米海軍の原潜の行動に適切に対応するため、ソ連海軍は新たなSSNを必要とした。このような背景で開発されたのが、ヴィクターI・II・III級である。また、これとは別に、本来潜水艦が追求する静粛性を犠牲にし、高速力による米空母機動部隊への一撃離脱を企図して開発されたのがアルファ級である。その他にも、SSNに改造されたエコーI級、同様のヤンキー級など、ソ連は多種のSSNを保有することとなった。1982年の段階では、これらのSSNを北洋艦隊に35隻、太平洋艦隊に15隻配備していたと考えられる⁽²⁹⁾。

イ 通常動力潜水艦

ソ連海軍は原潜部隊の整備に力を注ぐ一方で、通常動力潜水艦の開発および維持も堅実に続けていた。SSBの新規開発はなかったものの、搭載SLBMを水中発射方式のSS-N-5（サブ）とする改造を施した19隻を、北洋、太平洋、バルト海艦隊にそれぞれ配備した。

SSGについては、水上発射方式のSLCMであるSS-N-3a（シャドック）を搭載したジュリエット級を新たに開発した。ソ連海軍は同級を戦力として評価しており、1990年代半ばまで現役に留めた。

SSはタンゴ級とキロ級が新規開発されている。キロ級は、ソ連海軍のSSでは初めての完全な涙滴型船体の採用、性能の向上等により、西側のSSと同等の能力を獲得したと考えられる。新型艦の開発と並行して進められていたSSの世代交代は、ブレジネフ期を通じて緩やかに行われ、1964年において352隻⁽³⁰⁾の規模であったSSは、1982年には144隻⁽³¹⁾にまで整理された。

(4) 潜水艦の意義・役割

ア 原潜

SSBNは、ソ連本土が核攻撃を受けた場合の報復戦力あるいは米国の核兵器による第一撃を受けた後でも十分に生き残り、かつ米国に対して耐え難い被

(29) *Jane's Fighting Ships 1981-82*, p. 470.

(30) *Jane's Fighting Ships 1963-64*, pp. 425-427.

(31) *Jane's Fighting Ships 1981-82*, pp. 486-490.

害を与え得る第二撃⁽³²⁾戦力として扱われた。その理由は、潜航して任務に従事するSSBNは通信能力が低下することおよび当時の主力SLBMのSS-N-8 Mod2（ソーフライ）の半数必中界が900mから1.5kmと広く、敵戦力を先制攻撃することは困難であったことにある。実際の能力については、ヤンキー級およびホテル級は搭載SLBMの射程から、大西洋中部あるいは東太平洋まで進出しなければ米国本土を攻撃できなかったため、西側海軍の対潜能力を考慮すると確実な報復・第二撃戦力とは言えなかった。したがって、一応の安全と言えるバレンツ海およびオホーツク海から米国本土を攻撃できるという意味において、確実な戦略核戦力と呼べるのは、タイフーン級、デルタ級およびホテル級の一部であり、1982年の段階におけるこれらのSSBNは35隻、SLBMは478基であった。

これに対し、米海軍のSSBNは41隻、SLBMは656基であるとともに、主力SLBMポセイドンC-3の半数必中界は550mであった。戦略核戦力の実態として、ソ連海軍は米海軍に圧倒されており、だからこそ米海軍を大幅に上回るSSBNを保有して、数的優越を確保しようとしたものと考えられる。

SSGNは搭載SLCMの水中発射化により、実戦能力を向上させた。しかし、SSGN自身の目標捜索能力は小さいため、水上艦艇・航空機の支援なしには敵空母機動部隊に対する攻撃は困難であった。米海軍もSSGNを脅威と認識しており、空母艦載機や護衛艦艇の強化、護衛SSNの配備等により、チャーリーI・II級に対応した。ソ連としては、敵空母機動部隊に対する攻撃の可能性を有するSSGNに軍事戦略上の一定の評価を与えたものの、実質的意義はそれほど高くはならなかった。

自国の戦略核戦力の安全を確保し、敵の戦略核戦力の活動を阻止することは、ソ連の戦略核戦力の実効性を担保することと同意義であり、味方SSBNの防護と敵SSBNの行動阻止が第1の任務⁽³³⁾とされたソ連SSNの軍事戦略上の意義は高いものであった

と言える。さらに、SSNには敵空母機動部隊に対する攻撃、海上交通路の破壊が期待されており、それらの面でも重要な戦力とされた。しかし、当時のソ連SSNの性能を考慮すると、SSBNの防護以外の任務を戦時において実施するのは困難であった。

急速に増強されたソ連の原潜は西側にとっては大きな脅威であり、常に対応を迫られるものであった。ソ連軍事戦略における戦略核戦力としてのSSBNの意義は、ブレジネフ期に至って不動のものとなり、現在に至っている。また、敵との直接的交戦を任務とするSSGNおよびSSNについては、技術水準が直接戦力に反映されるため、軍事戦略上の意義も敵の技術水準との優劣を反映するものとなる。しかし、現実に米海軍と交戦した場合に戦果を挙げ得るのはSSGNおよびSSNであったと考えられることから、これらの軍事戦略上の意義もまた高かったと言える。

イ 通常動力潜水艦

通常動力潜水艦の中で、戦略核戦力として位置付けられていたSSBは、米国本土を攻撃できる海域に展開するのは実態として不可能であったため、ヨーロッパおよびアジアにおける米国の同盟国に対して脅威を与えることを目的とした。

SSGは、SLCM発射時に所在を暴露しなければならず、味方部隊の支援の得られにくい外洋において攻勢的作戦を実施することは困難であった。したがって、味方部隊の支援を得られる沿岸、近海海域という制約の下、防勢的作戦を実施することが限界であった。

SSは、西側の水準に追いついたとされるキロ級の就役が1982年であったことから、ブレジネフ期においてはそれ以前の作戦と同様に、消耗を前提とした作戦海域への大量投入を想定したものと考えられる。したがって、西側海軍の対潜能力から、これらのSSが実戦場面で戦果を挙げ得たかについては疑問が残る。ただし、バルト海のような原潜の行動できない浅海域では、敵上陸部隊および護衛艦艇に対する戦力となり得た。結局ほとんどの場面において通常動力潜水艦は原潜の不足を補う存在であり、軍事戦略上の意義は極めて限定されたものであった。

(32) 防衛庁『平成16年版 日本の防衛—防衛白書—』（国立印刷局、2004年）7頁。

(33) アンドレイ・V・ポルトフ『ソ連／ロシア原潜建造史』（海人社、2005年）27頁。

4 ゴルバチョフ期

(1) 軍事戦略の変化と海軍力整備の方向

1985年3月、ミハイル・S・ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任したとき、直面したのは疲弊したソ連経済であった。そこで、ゴルバチョフは「建て直し」「再建」を意味するペレストロイカを唱えて社会主義体制の改革に着手するとともに、対外的には軍縮を打ち出したのである。当時のソ連軍は、実態として特に戦略核戦力の部分において米国に対し劣勢にあり、これを補うために膨大な数を必要としていた。ゴルバチョフの軍縮の目的は、米ソの軍事力を数的に低い水準で対等なものとし、余剰戦力を削減することでソ連軍の効率化を図ることにあると考えられる。

ゴルバチョフ期に入ると、ソ連軍事ドクトリンは、核兵器の先制不使用、自らが攻撃対象とならない限り通常兵力の先制使用を含む軍事行動を始めないなど、防勢的な性質に変化した。それを受けて軍事戦略は、敵の侵略行動に対しては防勢行動によって対処することを基本としながらも、最終的な軍事目的を達成するためには「防勢、あるいは防衛により、敵の攻撃を挫折、あるいは撃退するだけでは不十分で、あくまでも攻勢、あるいは攻撃により敵を完全撃滅⁽³⁴⁾」する必要があるとの認識に立っていた。これらから、ブレジネフ期の軍事積極性を背景とした攻勢偏重の軍事戦略と比較すると、ゴルバチョフ期のソ連軍事戦略は防勢的な性質となったというべきであり、専守防衛的な方向に大きく変化したものではなかった。そしてその狙いは、攻撃・防衛の均衡のとれた質の高い軍事力を確保することによって、西側に対抗することにあると考えられる。

1885年12月、ウラジミール・N・チェルナヴィン元帥は、ゴルシコフ元帥の後任としてソ連海軍総司令官に就任した。彼は、ソ連の軍事戦略が防勢的な方向に移行する中で、新鋭艦艇の建造を積極的に進める傍ら旧式の艦艇の廃棄を推進することで、海軍の質的向上を図った。その動きは潜水艦について

(34) 乾一字「ペレストロイカ下におけるソ連軍一軍制改革、兵力削減、軍事思想一」『新防衛論集』第17巻第4号（防衛学会、1990年3月）69頁。

も同様であった。

(2) 開発・建造された潜水艦

ゴルバチョフ期は新型SSBNの就役はなかったものの、タイフーン級およびデルタIV級の配備を進めると同時に、ヤンキー級およびホテル級を徐々に除籍させ、戦力の質的充実を図った。

SSGNについては、オスカーI級およびその発展型のオスカーII級の登場を見た。オスカーI・II級は、船体に装備された衛生情報収集システムと搭載SLCMのSS-N-19（シップレック）とを連動させ、1基のSLCMで1隻の敵艦艇、あるいは1群をもって敵空母機動部隊を攻撃するのを原則としている⁽³⁵⁾。これにより、対水上攻撃能力は飛躍的に向上したと考えられる。また、ゴルバチョフ期のSSGNは50隻を保っていること⁽³⁶⁾から、ソ連海軍はSSGN戦力の実質的な強化を図っていたと見られる。これは、オスカーI・II級に搭載するSS-N-19の核弾頭を戦略核戦力の予備として考慮したことも理由の一つであるとされる。

SSNは、ヴィクターIII級の後継としてシエラ級とアクラ級が開発された。シエラ級はアルファ級の建造で得られたチタン合金技術を船体の一部に反映させたものの、非常に高価になったので建造を少数で打ち切り、シエラ級を原型とした鋼製のアクラ級の開発、次いで量産に移行した。アクラ級の性能は米海軍のロサンゼルス級とほぼ同等と言われ、ソ連海軍のSSNとしては最も成功したとされている。ゴルバチョフ期もSSNの増強は続けられ、1991年には81隻⁽³⁷⁾を擁するに至ったのである。

通常動力潜水艦は、すべての艦種で減少した。特にSSBはソ連最末期の1991年にはすべて除籍されている。SSBはジュリエット級16隻⁽³⁸⁾、SSは現役120隻、予備役57隻⁽³⁹⁾がソ連崩壊時の通常動力潜水艦の勢力であった。

(35) ポルトフ『ソ連／ロシア原潜建造史』87頁。

(36) *Jane's Fighting Ships 1984-85*, p. 497.; *Jane's Fighting Ships 1990-91*, p. 578.

(37) *Jane's Fighting Ships 1990-91*, p. 578.

(38) *Ibid.*, p. 588.

(39) *Ibid.*, p. 578.

(3) 潜水艦の意義・役割

ゴルバチョフ期においては、ソ連軍事戦略上の原潜の役割はますます重要なものとなった。SSBNについては、タイフーン級およびデルタIV級の本格的な運用開始により、バレンツ海から発射できるSLBMの数が増加し、戦略核戦力としてより一層の重要性を持つようになった。また、オスカーI・II級とSS-N-19との組み合わせは、敵空母機動部隊に対するSLCM攻撃の可能性を高め、SSGNは、西側海軍による一方的な海洋使用を拒否し得る戦力となった。さらにSSNは、特にアクラ級の成功により、効果的にSSBNを防護できるようになったことに加え、敵の対潜警戒網を突破できる可能性も向上したため、水上艦船への攻撃力としての意義を高めた。

一方で、通常動力潜水艦は軍事戦略における意義を低下させていった。1980年代において西側諸国の対潜兵力に対抗できるソ連海軍のSSは、すでにキロ級のみとなっており、数も潜水艦全体の1割程度であった。

5 エリツィン期

(1) 冷戦後のロシア軍事戦略と海軍

1991年12月、ソ連は崩壊した。旧ソ連の国際的権利や国際法上の関係はロシアに継承されるとともに、ソ連軍の核兵器を含む主力はロシア軍に移行した。ロシア大統領に就任したボリス・N・エリツィンは、ソ連崩壊による政治の混乱、経済の破綻等の問題に直面するとともに、欧州通常戦力(CFE)条約および第1次戦略核兵器削減条約(START I)に基づく軍縮に取り組みなければならなかった。

エリツィンは、1993年11月に「ロシア軍事ドクトリンの基本規定」を公表し、そこで世界戦争の脅威は著しく減少しているものの、局地戦争と武力紛争が極めて危険なものとなっているという情勢認識を示した。そしてロシアは戦略核戦力による報復力に期待する一方で通常戦力を大幅に削減し、費用対効果の高い安全保障を確保しようとしたのである⁽⁴⁰⁾。これらを背景としたエリツィン期のロシア軍事

戦略は、世界戦争の抑止を前提として、発生した局地的な戦争や紛争には効率性を高めた通常戦力で対処するというものとなり、ゴルバチョフ期よりもさらに防勢的なものとなった。

軍縮と防勢的軍事戦略は当然海軍にも影響を及ぼし、ロシア海軍は「対外政策、経済的利益と国防を保障する手段のひとつとなり得る海軍の創設⁽⁴¹⁾」を目標として再編を進めた。一方で、海軍戦略については「抑止と協力という海軍運用の平時のコンセプトと、適時の防衛と侵略の阻止という戦時のコンセプト⁽⁴²⁾」という西側での一般的な海軍戦略と替わらないものとなり、そのための海軍力は、潜水艦と汎用型水上艦艇に重点を置くものとされた。これらの方針の下、ロシア海軍は1999年末までに、ソ連崩壊時と比較して主要艦艇で73%、人員は57%の削減を実施した⁽⁴³⁾。

(2) 潜水艦の状況

ロシア海軍は、新型SSBNボレイ級の開発を進めていたものの、経済的理由からエリツィン期に就役することはなかった。保有していたSSBNについては、START Iに基づき削減を進め、1999年末には現役24隻、予備役2隻にまで削減している⁽⁴⁴⁾。しかし、削減の対象となったのは旧式のヤンキー級および近代化されなかった一部のデルタ級であり、予備役に編入されたのは維持費用の高いタイフーン級であったことから、実質的な戦略核戦力を損なうことなく対外的には軍縮の姿勢を示すことに成功した。

この時期のSSGNおよびSSNは、主として大規模戦争における通常戦力と位置付けられており、能力も局地的な戦争あるいは紛争に対処するものではなかったため、数的削減は新型艦にまで及ぶほど急激に進められた。その結果、SSGNの現役艦はオスカ

学出版会、2002年) 99頁。

(41) 木村康張「軍改革下におけるロシア海軍(1)ー海軍の苦悩(理想と現実の矛盾)に関する実態分析を中心にー」『波涛』第32巻第4号(兵術同好会、2006年11月)50頁。

(42) 同上。

(43) *Jane's Fighting Ships 1991-92*, p. 581. と *Jane's Fighting Ships 2000-01*, pp. 552-553. とを比較して算出した。

(44) *Jane's Fighting Ships 1998-99*, p. 545.

(40) 仙洞田潤子『ソ連・ロシアの核戦略形成』(慶應義塾大

一Ⅱ級 11 隻のみとなり、SSN の現役艦は 26 隻⁽⁴⁵⁾で、最新鋭のアクラ級ですら予備役に編入される状況となった。

通常動力潜水艦に至ってはさらに厳しい状況であり、SSG はすべて除籍され、SS のみが現役に残った。しかも、作戦行動が可能なのはキロ級のみであった。

(3) 潜水艦の意義

エリツィン期のロシア軍事戦略において、海軍の第 1 の任務は戦略核戦力の維持であり、作戦行動は SSBN による戦略哨戒を中心とした。一方で、敵空母機動部隊に対する攻撃や海上交通破壊戦は、米国との直接対決の場面における任務となるため、SSGN および SSN の役割は副次的なものとなった。また、CFE 条約により欧州正面の脅威に注目が集まったため、相対的に海上からの脅威に対する意識は低下し、沿岸・近海海域での敵水上艦船の撃破を主任務とする SS の役割は、一層軽いものとなった。エリツィン期の潜水艦の意義は、SSBN については戦争抑止という軍事戦略上の重要性を持っていたが、その他については極めて低下したものと言える。

6 プーチン期以降

(1) ロシア軍事戦略

2000 年 5 月、大統領選挙に圧勝したウラジミール・V・プーチンは、ロシア大統領に正式に就任し、安全保障構想および軍事ドクトリンの改訂作業に取り組んだ。その中でロシアは、米国による世界の一極支配に反対し、世界の多極化を推進するとしている。また、米国の圧倒的な軍事および経済力、米国主導による NATO の域外軍事行動等をロシアに対する脅威と捉えたため、ロシアの安全保障構想および軍事ドクトリンは、米国および NATO を強く意識するものとなった。

ところが、米国同時多発テロを契機にロシアは一旦対米協調路線に移行していった。この動きは、当時の低迷するロシアの国力を考慮して、米国および NATO との直接的対峙を回避することで安定した国

際環境を確保し、その間に自国の軍事・経済力の回復に努力するというソ連時代からの伝統的な手法の現れと考えられる。したがって、プーチン期のロシア軍事戦略は、基本的には戦略核兵器による抑止効果に期待するというエリツィン期の軍事戦略を踏襲した。ただし、プーチン期の初期においては、通常戦力の効率化および質の向上が期待を下回るものであったため、通常兵器による攻撃に対しても状況によっては戦術核兵器の使用を考慮するものとなった。

しかし、近年はグルジアにおける軍事行動等、明らかに対米協調路線とは異なる傾向を示しており、軍事ドクトリンおよび軍事戦略が見直されている可能性がある。これは、近年の好調な経済による国力回復と、それに伴う国防予算の増加等が主たる理由である。

(2) 潜水艦の状況

ロシア海軍の整理はあらゆる部門に及び、数的には最低限の水準にまで引き下げられた。2008 年の段階における潜水艦の状況は、SSBN15 隻、SSGN と SSN を合わせて 25 隻、SS21 隻⁽⁴⁶⁾であり、数的な対米対等への配慮は特に見られない。新型艦としては 2007 年 4 月に SSBN ボレイ級が進水したものの、全体的には当初の計画から遅れているとともに、搭載する新型 SLBM も未だに配備には至っていない⁽⁴⁷⁾。したがって、戦略核戦力の更新には今しばらくの時間を要すると考えられる。SSN についても新型艦の開発は遅延しており、戦力の更新は停滞している。SS に関しては、遅延していたキロ級の後継艦が 2007 年に進水し、2008 年の段階では海上試験中である⁽⁴⁸⁾。

(3) 潜水艦の意義

ロシアは、戦略核戦力の代替更新のため、移動式 ICBM の開発および導入に力を注ぎ、その努力は 2005 年の「トーポリム」(SS-27) の部隊配備となって結実した。これに対し、SSBN および SLBM の更新は一步遅れてはいるものの、開発努力は継続され

(46) *Jane's Fighting Ships 2007-08*, p. 623.

(47) 防衛省『平成 20 年版 日本の防衛—防衛白書—』(ぎょうせい、2008 年) 61 頁。

(48) *Jane's Fighting Ships 2007-08*, p. 634.

(45) *Jane's Fighting Ships 1998-99*, p. 545, p. 550.

ている。これらから、移動式 ICBM と比較して即応性、整備性等の面で劣るものの、残存性の極めて高い報復あるいは第二撃戦力として、ロシアは軍事戦略において SSBN を高く意義付けていると言える。

SSN 用の SLCM である SS-N-21 (サン普森) の性能向上に伴い、SSGN はその役割を失いつつあり、現在では予備的な戦略核戦力という役割に移行していると考えられる。一方で、湾岸戦争、コソボ紛争等における米海軍 SSN のトマホークミサイルによる攻撃の正確性は、ロシア軍事戦略における SSN の意義に変化をもたらしたと考えられる。今後、SS-N-21 の性能向上に成功すれば、局地戦争等において、隠密かつ正確に目標を破壊できる通常兵器の運搬手段として、SSN の軍事戦略における意義は高まってくると言える。

おわりに

ソ連・ロシアにおける軍事戦略は、その時々国内外情勢によってさまざまに変化してきた。その根本は一貫して米国等の脅威から自国の安全を保障し、世界戦争が発生した場合においては、ソ連・ロシアの最終的な勝利のための方策を求めるものであった。その軍事戦略の下、海軍という軍種の一兵器である潜水艦もまた、ソ連・ロシアの安全保障あるいは戦争における勝利のため、さまざまな意義や役割を与えられてきた。

第2次世界大戦後、ソ連は外洋海軍の建設に着手したものの、技術的問題、海軍の低い地位等が障害となり、艦隊の整備は進まなかった。その中で、潜水艦は第1次および第2次世界大戦におけるドイツ海軍のUボートの戦果に着目し、大量に生産された潜水艦をもって、敵の海軍部隊の撃破あるいは海上輸送路の破壊によりソ連の勝利に貢献するという、軍事戦略上の補助的な意義を与えられた。

その後、原子力機関の搭載により本格的な隠密性を獲得した潜水艦は、敵空母機動部隊や海上交通路に対して現実的な脅威を与え得る存在となり、海軍の任務達成のための中核的存在となった。さらに、SLMB の発射成功と SSBN の就役は、原潜の意義を軍事戦略上極めて重要なものとしたのである。

ブレジネフ期に入ると、ソ連海軍は潜水艦を重視しながらも、ゴルシコフ元帥の考え方に沿って水上艦艇および航空部隊との均衡のとれた戦力整備に尽力していった。その結果、SLBM の射程は延伸され、SSBN はソ連に近い海域において、海軍部隊の支援の下、安全に戦略哨戒任務を実施できるようになった。これにより、潜水艦の意義はさらに高まり、中でも SSBN は、軍事戦略に欠かすことのできない存在となった。建艦技術の面では、1980年代末頃までは性能面で米海軍の原潜に大きく遅れをとっており、実戦場面での能力に疑問を生ずることもあった。しかし、現在のロシア原潜の性能は、米海軍の原潜に匹敵するものとなったと言われている。

このように、名実ともに充実してきたソ連・ロシアの原潜であったが、一時は厳しい経済状況のため、SSBN を除く潜水艦の価値を下げざるを得ない時期もあった。現在では、海軍全体として回復および更新の時期にあるものと考えられる。

潜水艦の存在意義は隠密性にあると言っても過言ではない。SSBN はほぼ完全な隠密性をもつ戦略核戦力であり、その報復および第二撃能力は、現在においてもロシアの抑止力の一端を担うものである。また、SSN および SSGN も、現在では敵による海洋の自由使用を拒否し得る能力を有しており、通常戦力を使用する場合は有力な戦力となる。そして、数は少なくなったものの、通常動力潜水艦は、バルト海のような浅海域あるいは沿岸海域において、敵の作戦を阻止または妨害する戦力として有用である。

潜水艦は、これからもロシアの軍事戦略において、戦略核戦力および海軍の中核戦力としての意義を持ち続けるであろう。

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)